

**(関西・中部地区) 第152回 昼食・講演会**

(12月11日 於、ホテルグランヴィア大阪)

**講師：金谷 安勝氏「浄土真宗 常福寺住職、(元)ニチメン」****演題：少子化とお寺(末寺)**

浄土真宗常福寺住職金谷安勝さんより「少子化とお寺(末寺)」という演題で講演していただきました。

住職は大手商社を辞めて仏門に入ったという変わり種です。末寺の経営から最近の日本の世相と将来に対する見方には考えさせられるものがあります。



そもそも「檀家」というのは梵語でスポンサーという意味で、寺や僧を援助する庇護者の意味だそうです。徳川家光の時代に寺院に檀家であることを証明するための寺請証文を発行させて幕府の政策に従わない宗教や宗派の信徒を見つけ出す方法として寺請制度が始められ、綱吉の時代に正式に幕法により、檀家寺への参詣や法要の施行、檀家寺の変更の禁止などを定めて檀家制度を統治システムとしてビルトインさせていたといえます。その後現在までこの檀家制度は存続しており、1995年頃までは機能していたそうです。それがいつの間にか墓をもっているから単に寺と繋がっているだけという関係になってしまったといえます。

その背景には農村から地方都市へ更には大都市へと

人々の移動が頻繁となり地縁・血縁をベースにした土着性の希薄化があります。

更に万事簡素化簡略化の風潮が檀家制度の形骸化を招き寺と檀家との関係も疎遠となりました。その結果制度の枠組みに入らぬ葬儀業者

が葬儀一切を手配するということが大都市でも地方都市でも普通になってしまいました。



田舎では満中陰まで何日も掛けるのに東京では2日、大阪でも3日、法事も簡便に、直葬や家族葬と万事時間を掛けずにやるというのが今の風潮だそうです。

つまり寺に人々が求めているのは教義ではなく葬祭の司祭者であり今や葬儀や法事以外の結びつきは極めて弱いものになってしまいました。

その結果住職の生計が立てられず無住寺や廃寺が出現し、葬儀や法事の際は近隣住職による代参が増加しつつあります。

つまり時代とともに稲作文化を基盤として発展してきた日本の原風景が失われ、「夕焼け小焼けで日が暮れて山のお寺の鐘が鳴る」のも歌の世界の話だけになりつつあります。

(関西・中部地区運営委員長 平沼 重巳・記)

